

Department of Policy and Planning Sciences

Discussion Paper Series

No.1356

社会工学オーラル・ヒストリー：川上彰（技術職員）

(PPS Oral History: Akira Kawakami, former technical official)

by

島田 夏美、黒田 翔
(Natsumi SHIMADA and Sho KURODA)

Sept 2018

UNIVERSITY OF TSUKUBA

Tsukuba, Ibaraki 305-8573
JAPAN

社会工学オーラル・ヒストリー:川上彰(技術職員)

○ 語り手

川上彰 元筑波大学技術職員

○ 聞き手(五十音順)

黒田翔 筑波大学大学院システム情報工学研究科

島田夏美 筑波大学大学院システム情報工学研究科

辻本隆宏 筑波大学大学院システム情報工学研究科

○ 編集者

島田夏美 (同前) s1630143@u.tsukuba.ac.jp

○ 概要

本稿は筑波大学システム情報工学等技術室にて技術職員として従事されていた川上彰さんのオーラル・ヒストリー(口述史)であり、筑波大学社会工学関連組織(社会工学類、社会工学専攻、社会工学域)の歴史を記録することを目的とした「社会工学オーラル・ヒストリープロジェクト」の第一弾となる。プロジェクトは大学院生を中心とした有志のグループが企画したもので、インタビューは

- ・ 2018年4月21日(土) 於 筑波大学 3F11-Lounge

に実施した。編集は島田が、編集のチェックは黒田が行った。

本活動に係る費用の一部は筑波大学社会工学類広報委員会より助成を受けた。

○ 社工

1975年に社会工学系(研究組織)、および博士課程計量計画学専攻(当初は社会科学研究科、のちに社会工学研究科として独立)が設置される。翌年に経営・政策科学研究科が設置され、1977年には第三学群社会工学類に第1期生が入学する。その後、大学院や学群の改組・再編を経て、現行の主な組織は以下の通り。

- ・ 理工学群社会工学類(学士課程)
 - ・ 社会経済システム主専攻、経営工学主専攻、都市計画主専攻
- ・ システム情報工学研究科社会工学専攻(大学院課程)
 - ・ (博士前期課程)社会工学学位プログラム、サービス工学学位プログラム
 - ・ (博士後期課程)社会工学学位プログラム
- ・ システム情報系社会工学域(教員組織)

○ 語り手の略歴

川上 彰(かわかみ あきら)

昭和29年(1954年)生まれ。都立国立高等学校、宇都宮大学工学部電気工学科を卒業し、民間企業に就職。公務員試験を受けて、1978年筑波大学へ文部技官として入職。2008年に、システム情報工学等技術室 技術専門職員、2010年に技術専門官となり、2015年定年退職。退職後、シニアスタッフとして筑波大学東京キャンパス非常勤職員として従事(2015-2016年)。

○ インタビュー

— まず、筑波の社工の技術職員の業務を教えてください。

川上：業務としては、教員補助であったり、事務のお手伝いをする大学運営の補助とかもあります。メインでやることよりは、やっぱり補助的な業務が多いですかね。

— 技術職員の方々は、どのように入職されたのでしょうか。

川上：採用が法人化前であれば、国家公務員試験を受けて、その後に筑波大学の採用面接を受けて採用されたという人が、半数ぐらいだと思うんです。あとは、それと別に筑波大独自の採用試験で入ってきた人もいました。

— 川上さんが、筑波の社工に入った経緯を教えてください。

川上：私は、大学を出てから1年間ほど民間企業に在籍して。その民間企業の仕事が非常にヘビーな状態で、残業も100時間を超えるような、今で言う「ブラック」といわれるような会社に近かったんじゃないかと思うんです。勤めていて、これでは身が持たないと、1年にして音を上げたような状態です。

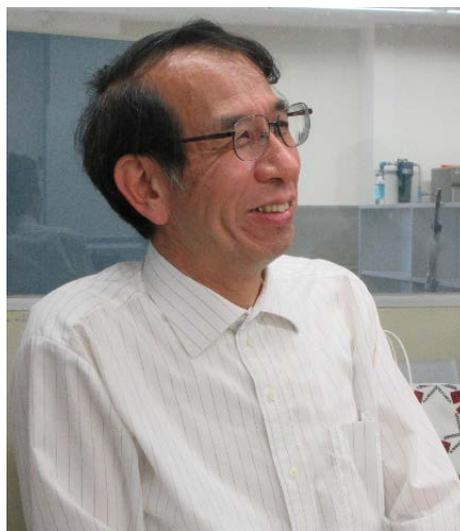
そこで、国家公務員の試験を受けまして、幸い合格して一番最初に採用通知を頂いたのが筑波大学だったんです。そういうこともあって入ってきて、どんな環境で、どんな仕事をするのかというのは、一切分からない状態で飛び込んできたような状況でした。

当時は、国家公務員試験に受かると、合格者名簿というのが各機関に配布されて、その中の機関から面接通知が来まして、受けに行くと、その後、採用の連絡が来るという形でした。

最も早く返事が来た「筑波大学」に、昭和53年2月16日に、筑波大学研究協力部研究協力課(第三事務区)文部技官として入りました。

— 最初から現在の技術職員室のある3E棟での業務でしたか。

川上：いえ、まだE棟はなかったんです。人文社会学系棟という、図書館の向かい側にある建物の4階に部屋を用意してもらって、先輩2人と居室として使わせてもらってました。ただ、ずっとそこにいたわけではなくて、体芸棟にコンピューターが置いてあって、プログラムを



撮影：島田

作ったり、実際に稼働するまでの準備をそこでしていたんです。

— パソコンのお仕事をするとということで、公務員採用試験を受けられたのでしょうか。

川上： その頃は公務員の試験区分に情報というのはなかったんです。私は電気通信という分野で試験を受けて入ってきていまして、さらに言えば、パソコンというのもなかったんです。その頃にミニコンピューターといわれる汎用機より規模の小さいコンピューターが入っていて、それを制御器としていろんな操作をする実験装置のスタッフとして入ったという形です。入ってからその現場に応じて仕事をするという感じでした。コンピューター回りは民間にいた頃、やはり情報系の会社だったから、ある程度はやっていましたが、主に現場で覚えながら対応していきました。

そのコンピューター自体は 10 年以上は稼働したと思います。その間にもいろんな機械が次々と入ってきて、そちらのほうも見て、機械だけではなくて授業の対応ですとか、試験監督とか入試対応とかの雑務もあり、その辺を順次こなしていきました。

入職した当初というのは、社工の技術職員は私を含めて 3 人しかいなかったんです。その時はそのコンピューターシステムの担当の先生がいました。ほとんどその関係の数名の先生としか交流はなかったんです。その後、技術職員がどんどん採用になりまして、一時 10 人を超えるような人数になったんです。

その頃に技官委員会というのが社会工学系の中にできまして、司馬正次先生¹が委員長を担当してくださり、業務を進めるという形ができました。社工の教員とは、授業で会うとか、実験装置でお付き合いするとか、委員会とか、そういうレベルでは結構頻繁にお会いするんだけど、中にはあまりご縁のない先生もいたかもしれません。

— 入職当時の業務内容と近年の業務内容を比較して、変化した部分などありましたか。

川上： 入った当初は社会行動実験装置という、先ほど話した装置がありまして、メインは Interdata8/32 というコンピューターで、当時としては画期的に新しい機械だったんです。それを何とかして稼働させて運用に持ち込むということで、全力を挙げてやっていたんです。

同時に、その後 1~2 年すると次々にいろんなコンピューターシステムが入ってきました。地域シミュレーターとか、多目的統計データバンクシステムとか、IBM のデータベースマシン等の実験装置が入ってきて、技術職員が割り振られていきました。それと並行して、授業の対応もあって、いろんな実習・演習を担当しました。平成 16 年ごろからしか資料が残ってなくて(資料 1)、その頃だと 1 人 1 年を通して 5 つから 6 つの授業を担当しているという形でした。

— 実験装置は、授業で用いられていたのでしょうか。

¹ 司馬正次(シバ ショウジ) 経済学博士。筑波大学名誉教授。

川上：授業というよりは、研究ですね。たとえば、最初の社会行動実験装置は、大討論室の前面に大きなスクリーンがあり、40 くらいある席には「回答器」と呼ばれる小さな機械がありました。私が知っている実験は、政見放送を流しながら、ここがいいとか悪いとかを見ている人が回答器に入力すると、その情報がリアルタイムでスクリーン上に出て評価されるんです。どういう話が、どういう影響を与えるかというのを見たかったようです。

それとは別に小討論室があって、小さなパーティーションで4つか5つの部屋に区切られていました。各部屋にはカメラとディスプレイがあって、部屋同士をつないでテレビ会議をしたり、ディスプレイにデジタル画像を合成して出力することができたのですが、どのように合意形成を目指すかが研究されていたと思います。

その後は、地域シミュレーターという大型プロッターが付いたシステムがあったり、多目的統計データバンクでは、統計データを処理したり、マクロモデルを作ったりして利用されていました。

実 習 名 担 当		学類・実習関連業務(平成16年度)																								
		1学期								2学期								3学期								
		1年	2年	2-4	2-4	2-4	2-4	2-4	2-4	1年	2年	2年	2-4	2-4	2-4	2-4	1年	2年	2-4	2-4	2-4	2-4				
		情報リテラシー演習	社会工学実習	経営工学情報実習	グローバルシステム演習	経営工学実習	都市計画実習	都市データ分析	プログラミング実習	計画ファイナンス演習	都市計画情報実習	社会調査実習	経営工学実習	都市地域経済学演習	アメリカン製造のまちづくり実習	プログラミング実習	社会経済システム情報実習	戦略行動システム演習	経営工学実習	社会政策の未来演習	都市・国土・空間計画実習					
曜日(時間)	本 14:30-16:00	木 14:30-16:00	金 14:30-16:00	土 14:30-16:00	日 14:30-16:00	月 14:30-16:00	火 14:30-16:00	水 14:30-16:00	木 14:30-16:00	金 14:30-16:00	土 14:30-16:00	日 14:30-16:00	月 14:30-16:00	火 14:30-16:00	水 14:30-16:00	木 14:30-16:00	金 14:30-16:00	土 14:30-16:00	日 14:30-16:00	月 14:30-16:00	火 14:30-16:00	水 14:30-16:00	木 14:30-16:00	金 14:30-16:00	土 14:30-16:00	日 14:30-16:00
(対応人数)	3	3	2	1	1	2	1	3	2	2	2	2	1	1	2	3	1	1	1	1	1	2				
昨年度 (対応人数)	1	3	3	2	2	1	1	3	2	2	2	2	1	2	3	1	1	2								
A	○	○											○	○			○		△							
B			○	○				○							○	○						△				
C		○	○						○	○							○	○								
D	△			○	○		○	○					○						○							
E		○			○					○					○							○				
F			○	○		△				○	○						△		○							
川上 彰			○			△		○							△		○									
	経営政策科学研究科対応(支援)																									
G	経営政策科学研究科対応(専任)																									

△は通常の授業では対応しないが、○の担当者が対応できない場合の予備委員

資料1:技術職員の担当授業業割り当て表(平成16年度)

川上さんよりご提供頂き、一部変更・抜粋

— 当時の最先端の機械が、研究目的であったということなんですね。

川上： そうです。結構高額な機械、貴重な機械だと思います。そういう意味では、予算が今よりはあったのかもしれない。

— 機械回りの整備・運営から始まり、その後、授業の担当をされたのでしょうか。

川上： 実験装置というのはやっぱり 10 年、20 年もすると古くなってしまって、技術進歩も早いものですから、終わってしまうんです。今度は並行して学類のコンピューターが結構重要なポジションを占めるようになってきたんです。

最初の頃は、学類のコンピューターというのは、学類棟もなかった時代ですから、ありませんでした。私が入った時のコンピューター実習は、数学科のコンピューターを借りてやっていました。2 年間だったかな、短い期間だけれども、向こうに借りに行っていました。

— パーソナルコンピューターではないんですね。

川上： あの時は、カードベースだったかな。ちょっとろ覚えですが、パンチカードを使っていたと思います。穂鷹良介先生²が GPSS という待ち行列シミュレーションの授業をなさっていました。

その後、C 棟ができて、学情センターから回線を引っ張ってきて、コンピューター端末を設置するという形になってきました。それが社工のコンピューター室の始まりですかね。場所はいまと同じで、C 棟の 1 階でした。機械もダム端末といわれる、キャラクターベースの文字が出るだけ。あとはテレタイプがあったかどうかというところですね。コンピューターの導入とか最初の設置は、業者さんが行ってくれます。業者さんは設置から動くところまでは面倒を見てくれますが、その下準備はこちらでやりなさいということだったと思います。

最初の時はそう大した負担はなかったんですが、そのうちに全面的にシステムを社工に持ってきたんです。1985 年からホストも端末も全部社工へ持ってきて、運用管理もこちらでやることになって、業務の比重が少しずつ増えていったように思います。

2001 年から、今まで 2 部屋の端末室が 3 部屋になって台数が増え始めて、面倒を見る機械が増えてきたという形です。社工の端末室といっても Macintosh があつたり Windows パソコンがあつたり、UNIX のサーバーがあつたり、ネットワーク回りがあつたりで、その中の機能を幾つか分けて、技術職員が分担して対応しました。

— 頂いた資料(資料 2 参照)に技術報告という列がありますが、これも業務だったのでしょうか。

川上： これは主な業務ではなくて、技術職員が担当している業務の一部を報告書として上げてい

² 穂鷹 良介(ホタカ リョウスケ)筑波大学名誉教授。2006 年逝去。

るものです。社工に限ったわけではなくて、筑波大学の技術職員が出しています。内容もさまざま、医学の人もいるし、農林の人もいるし、そういう意味で中身はばらばらですが、技術職員の仕事の一部の紹介として、見ていただければと思います。

社工が関係している内容としては、業務報告的なものと、あとはソフト開発の紹介が多いと思います。

— (資料2を見ながら)「論文の主査・副査割り当ての自動化」などすごく気になるんですけども、実際に使われたのでしょうか。

川上: これは、経営・政策科学研究科で主査・副査を決めるのを自動化するソフトを開発しましたという報告です。詳細はウェブ³のほうで中身を見られますので、もし興味があれば見ていただければと思います。

— 実習も担当されていたんですね。

川上: そうです。実習の名前は変わることがあって、昔あったもので今はなかったりするものもあります。

コンピューター実習とは別ですが、私が印象に残っているのは、ビデオを使った実習がありまして、5〜6人のグループに対してテーマを決めさせて、ビデオカメラを貸し出すんです。当初のビデオテープは20分までしか撮れないんですが、それを持ち出していろんな所、学内とは言わず、あっちこっちでビデオ取材をしてくるんですね。で、そのビデオ取材をした結果を、編集装置があって、その編集装置にかけて、まとめて報告するという実習もあったんです。

川上が対応した機器や業務	社工学部関係者名 (川上個人の担当)	技術報告(社工、経営と関連の強い物のみ) (括弧内は担当技術職員名・人数)	社工学部教育用計算機	備考
1979 社会行動調査装置(多分1981年まで?)				渡田(2名担当)
1979	社会工学(主査)※(作業?) (1980年用家内版?)			並田(筑波大学工学部系棟(1979年3月))
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
2010	・社会工学実習 ・社会工学(主査)※ ・プログラミング実習 ・社会経済システム上層実習 ・マーケティングサイエンス	春学期: 学数2科目(12名)、新設2科目(12名)、 秋学期: 学数1科目(11名)、新設1科目(12名)		2学期14〜15行
2014	・社会工学実習 ・情報システム・演習 ・プログラミング実習 ・マーケティングサイエンス	春学期: 学数2科目(11名)、新設2科目(12名)、 秋学期: 学数1科目(11名)、新設1科目(12名)	リソース: OMax(150台・301型)、IBM LANの増設	
2016	・社会工学実習 ・社会工学(主査)※ ・プログラミング実習 ・マーケティングサイエンス	春学期: 学数2科目(11名)、新設2科目(12名)、 秋学期: 学数1科目(11名)、新設1科目(12名)		社工担当者 6人(2015年3月期以上退職)
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮

資料2: 川上さんが今回のインタビューに合わせて作成して下さった資料(一部変更・抜粋)。年次ごとに対応した業務や技術報告、計算機などについて記されている。背景が着色されている箇所は正確な資料がなく、主に記憶による内容とのこと。

³ 和地貴仁「論文の主査・副査割り当ての自動化」『技術報告集』No. 18, 1998.
(<http://www.tech.tsukuba.ac.jp/report.html>)

— 実習にも最先端の高価な機械が用いられていたんですね。

川上: 編集装置もそれほど台数がないんです。確か2台だったかな。時間の割り振りも難しく、学生からは「土日でも使わせてほしい」とか「夜遅くまで使いたい」といった要望もありました。厳しい環境ではありましたが、頑張って作っていました。

— 当時の学生にとっては、学校に来れば触れる珍しい機械だったのでしょうか。

川上: ですね。自分たちのテーマに沿って作品を仕上げなきゃいけないと、結構どたばたやっていたようですね。

コンピューターに関しての実習は昔に比べると今のほうがレベルアップというのかな、ちょっと難しくはなっていると思います。理論的な背景は一緒なんでしょうけれども、それを使ったアウトプットをどうやって出すかというのは、なかなか工夫をしなきゃいけない部分が多くなっているのかもしれないですね。そういう意味で、先生たちが教えることも増えているのかもしれないですね。

— と、同時に技術職員の方々の仕事も増えているのではないのでしょうか。

川上: 授業の時に、ソフトが動かないとか、できないと言われた時に、見て、判断して、適切にその指導をしなきゃいけないというのは、やっぱりなかなかちょっとしんどい時がありますよね。その場で解決できない場合は、業者に聞いたりすることもあります。その使い方が悪いのではなくて、システムの不具合があってトラブルを起こしている場合もありますので。

— 当時の機械の整備運営と、それから授業のサポートというこの構図は昔から今までずっと同じような感じでしょうか。

川上: そうですね。昔は、社工の下に技官委員会というのがありまして、教員が頭に就いて調整してくれたわけです。仕事の割り振りとか負担の調整とかは、その委員会をベースにして動いていた部分が多いです。

ただ、2004年に法人化して、4年後の2008年に技術室が研究科の下にできて、そこへ移りました。

— 技官委員会が解体されて、法人化があって、今と同じ技術室という形になったのでしょうか。

川上: 独法化の影響も一部はあるかもしれないけれども。どちらかというと、技術職員の処遇改善がいろいろ叫ばれ始めて、それと関係しているように思います。

— 組織周りの変革の中で、技術職員さんたちの立場とかもしくは働きやすさとか、教員とか学生との距離感というのは、変わりましたか。もしくは変わらなかったのでしょうか。

川上： 社工の場合は、技官委員会というのはすごく重要な委員会だったと思います。

というのは、社会工学系から予算、出張費も頂いていたし、いろいろ配慮を頂いた部分が多くて、なかなかやりやすい場だったんじゃないかと思います。技官委員会の下で全体がまとまって作業をするという形を取っていただけたおかげで、こちらはすごくやりやすかったというふうに感謝しています。

昔に比べて、今は授業の対応時間は若干減ってきているように思います。一時期十数名いた技術職員が今はもう 6~7 名ですから、そういう意味で一人当たりの仕事量が増えてきてしんどいということもあって、授業の負担割合は少しずつ減っているように思います。

— 新しい人材を採用するという動きはなかったのでしょうか。

川上： 要望はあったんだけど、逆に 2000 年ごろの公務員だった時代に人員削減があったんです。定員削減というものがすごく厳しいのが来ていて、とにかく減ったらもう補充をしないということだったようです。

法人化した後も、人件費抑制というのがあって、なかなか補充はなかったです。

— 技術職員という立場は、大学として今後も続いていくのでしょうか。

川上： 各学系あるいは各組織に技術職員を配置するという形ではなくて、センターに集約するような形で技術支援の職員を置きたいという話は、かなり昔聞いたことがあります。ただ、現場のほうからは、それでは現場の運用がうまくいかないの、そういう形じゃ困るという話をしていたというものも聞いたことがあります。どのような形になるかは分かりませんが、将来的には、それほど大勢ではないにしても、ゼロにはならないんじゃないかというふうに、私は思っています。

— ゼロになれば、授業も含めてかなりの影響があるように思います。

川上： 統合とかという話が出てくるかもしれませんね。たとえば、幾つかの組織で一緒にやるとかです。今もシステム情報系の下に入っているわけですけども、構造がいたり、情報がいたり、社工がいたり、知能機能がいたり、ということで、その部門の技術職員が 1 つにまとまっています。そのような形で、ある程度まとまって各組織に対応するという形になるのかもしれない。

— 大学の予算縮小は、いろんなところから聞こえてきますが、職員の方々にも大きな影響があるのでしょうか。

川上: 人件費抑制はやっぱりもろに来ると思います。学系事務室も影響を受けていたと思います。昔は結構人数がいましたけれども、随分減りましたもんね。

— 社工の技術職員から、学内でもいいのですが他に移るとかはありましたか。

川上: 他へ移るとするのは数人かな。筑波大学附属坂戸高等学校へ移るとか、東京の研究施設へ移るとか、そういうレベルで移った人はいましたが、社工の技術職員で学内異動した人はいないですかね。

— 他の技術職員の方と交流はありましたか。

川上: 技術室ができた頃から技術職員全体での集まりが増えてきて、会議などで話をする機会は増えました。それまでは、同じ第三技術区の中でも、他の学系の技術職員が何をやっているかというのもよく分からないような状況でした。そういう意味では、技術室ができてから交流が増えたところかな。

他大学とも年に 1 回集まる機会があつて、様子も聞けたりして、それぞれ違う環境があるようで面白いです。

— 学内における技術職員の方々の技術発表会⁴は、どのように始まったのでしょうか。

川上: 2002 年に社工と電情と物質と数理と機能の 5 学系の技術職員による第三技術区が始めたのが第 1 回です。その翌年の 2003 年から、今度は全学規模になって、今までずっと続いています。

技術職員の交流と、今までやっている業務の成果を報告するということが主体だと思います。第三技術区の 5 学系の技術職員の中で、各学系の代表者が集まって定期的に会議を持っていたんです。その中でこういうものをやろうという提案があつて、それから起こったように記憶しています。

— 今までもずっとその大会は続いているんですね。

川上: 発表の準備がしんどいということもあつて発表者が少ない時期もありますが、今でも続いています。

— 第三技術区の方が始めた発表大会というのは、他の大学の何かをモデルにしたというか、触発されてという形だったんですか。

⁴ 筑波大学技術職員 web サイト (<http://www.tech.tsukuba.ac.jp/happyou.html>)

川上：数理物質の方が中心になったような気がします。他を参考にしたかどうかは、はっきり分かりません。

— さまざまな発表テーマがあるんですね。

川上：特に何って縛っていないので、出てくるものはもう多種多様です。興味があるものだけを見ていただければいいのですが、毎回それほど発表件数多いわけじゃないから、うまく合えばいいんですけども。

— 参加は自由ですか。

川上：自由です。ただ、面白いかどうかは分かりません。あんまり分野が違う話ですとなかなか興味を持ってもらえない部分もあるかもしれませんが。

— 専門的なところは、やはり自分たちでまとめて発表するという機運みたいなものがあるんですね。組織を別にしても、同じようなお仕事をしていると。

川上：そうですね。何か記録に残さないと、さっと流れてしまう。やっつけても、何かモチベーションが上がらないというか。何も残らずにどんどん終わってしまうというのが、一つにはあるような気がするんです。

— 評価にはつながらないんですね。

川上：今のところは反映されていないはずですよ。

— それは、もったいない気がします。

川上：その評価を誰がするかという話になった時に、きっと難しいんじゃないですかね。

— 大会発表のポスターを学内でみかけたことがあります。

川上：毎年3月ごろやっているんです。年度末にやります。1回だけ東日本大震災の時、あの時だけはできなかったんです。その年を除けば、毎年やっています。

技術報告というのが、実は技術発表会の前からありました。技術報告は技術発表会の何年前から出ていたかな。かなり昔からあるんです。口頭発表という形は取らずに、ペーパーを書いて出して、それが製本されてみんなに回ってくるという形になっていました。その後、技術発表会ができて、技

術報告と一緒にになりました。

— 技術職員さんではなく、事務の方も発表する機会はあるのでしょうか。

川上：事務の方も情報関係の人たちが発表しているのを見たことがあります。毎年、全国大会みたいな形でやっていました。私が聞いた時は、コンピューターの導入とか運用について、いろいろ業者さんとやって、どういった問題があったとか、どういう点が良かったというような話を事務の方がやっていました。大学としても、いろいろ情報化は進めていて、その辺の話をされていました。

— 技術職員の方々の雰囲気というのは、独特なところがあるように思っています。

川上：でしょうね(笑)。事務の方には異動もあるし、ちょっと違う雰囲気ですね。事務の方は、普通3～4年で動くんだと思うんです。こうやって同じ場所にいる人は少ないかもしれませんね。

— 「技術職員さん」というのは学生と先生たちをずっとそばで見えてきてくれた方だと思っています。今まで見えてきて、どういうふうに感じてきましたか。

川上：先生も学生も、優秀な人が多いですよ。先生にしてみれば、授業で話も非常に分かりやすく説明していただけますよね。学生の方も理解力は早いし。で、昔と今は何が違うかという、学生の場合、昔は比較的横へつながっていた感じを私は受けるんです。今は、2年生の実習でグループをつくっても、お互いがあんまりよく分かっていないように思います。1年のうちで交流というのはあんまりないのかなと思ったりもします。ただ、課題の提出物なんかを見ると、割ときれいにスマートにこなしてるんです。昔は、がりがりやっていたけれども、今はそういうのはあんまり見かけないような気がします。

先生方は、昔は結構人数がいて、100人弱はいたはずですよ。社工の先生は東京地区の先生とか、あと経政もいたんです。で、今見ると、多分50～60人じゃないかと思うんです。かなり人数が減っているわけですが、その割には仕事があんまり減っていないようにも思います。逆に委員会とか大学説明会とかいろんな業務が増えているんです。今の先生は研究する時間もなかなかなくて、大変だなというのが感想です。

— 人が減って仕事が増えてというのは、先生方に限らず、職員さんたちもおそらく同じ状況だと推測するのですが、仕事の進め方で変化はありましたか。

川上：そうですね。人を増やせという話は前に何度か出たことがあります。現実的には法人化前は文部省の裁決だし、法人化後は多分学長の裁量だと思うんですよ。法人化の後は増やさないとはいわなかったようで、必要な所には適正に配置するというような話だったように思うんですが。そ

の必要かどうかの判断が難しいところで、なかなかそれを認めてもらえないということになると、「うん、やむを得ないな」というところですかね。だから、できる範囲で対応するしかないというのが現実かもしれないです。

— 教員と同じように、職員さんも全学に対して意見をするシステムが整備されているのでしょうか。

川上：法人化の後は研究科の下に付きましたので、研究科長を通して大学の執行部へ上げていただくという形はありました。

言いたいことは言えたんじゃないかと思います。ただ、それを認めてくれるかどうかというのは、別の問題です。言いやすい環境ではあったんじゃないかと思います。

— 先生方との連携に対しては、いかがでしょうか。

川上：社工の技官委員会がなくなったあとも、個別の先生とは授業や実験装置に対しては今までどおり対応していましたので、特に言いにくいとか、困ったということはなかったと思ってます。

— 技術職員間ではいかがでしょうか。たとえば、仕事の割り振りなどはどうやって決まっていたのでしょうか。

川上：最初の頃は、技官委員会でどういう業務があるかという一覧を出して、その業務内容を誰が担当するかというクロス表みたいなものがあって、割り当てたんです。その時の司馬先生の方針が、ローテーション方式で、負担が均等になるとか、知識をいろいろ広めたい、更に、万が一その人がいなくなった時に困らないようにということでした。授業もローテーション制でやっていたんですが、人が少なくなったせいもあって、途中から固定されるような形になりました。

— 業務以外で、先生方との交流はありましたか。

川上：たとえば、社工の技官委員会の先生方が何人かいらっしやいまして、司馬先生がいた頃は自宅に呼んでもらって焼肉パーティーをやったり(笑)。その頃、林亜夫先生⁵や橋本昭洋先生⁶も一緒に担当してくださっていて、一緒にやりました。そのほかにも、新人が入ってきた時の歓迎会を学外のお店でやったり、辞める時の送別会を一緒にやったりもしました。

私の場合は、業務をお手伝いしたこともあって、学類コンピューターの仕様策定委員会関係の先生とは結構親しくさせてもらいました。

⁵ 林亜夫(ハヤシ ツグオ)筑波大学 社会工学系。

⁶ 橋本昭洋(ハシモト アキヒロ)筑波大学 名誉教授。

— たとえば、社経の人はこうで、経工の人はこう、都市のひとはこうというような傾向はありましたか。

川上: そうですね。都市計の先生方は上下関係が結構しっかりしていたような気がするんです。教授がいて助教授がいて講師がいてという、そういう上下関係が割ときっちりしていて動いていたような気がします。社経とか経工は割と横並びだったような気がします。

私が印象に残っているのは宍戸先生⁷です。宍戸駿太郎先生は結構親密にお付き合いをさせていただいて、家に呼んでいただいたりもしました。筑波大学を退職された後は、新潟の国際大学へ行かれて、そこを退職した後、麻布に事務所をつくられて、そこへも呼んでいただいたりもしました。結構フランクで、紳士的で、面白い先生でした。いろいろ教えてもらうものも多かったです。おとし11月に亡くなられちゃって、寂しい思いはします⁸。

— 宍戸先生について、お話を聞かせて下さい。

川上: 筑波大学での採用試験の面接官で宍戸先生がいたのは覚えています。多目的統計データバンクというシステムがあったんですが、その関わり合いが宍戸先生とありまして。その時に、マクロモデル関係でお手伝いをしたんです。それがお付き合いの始まりだったような気がします。絶対弱音を吐かないところがあって、すごい先生だなと感じました。

— 委員会つながりですが、コンピューター委員との関わりもあるのでしょうか。

川上: 最初の頃のコンピューター委員会というのは、穂鷹良介先生が委員長で、機器の運用方針とか予算配分とかいろいろ決めていたような気がします。

機器の運用とか消耗品の関係とか、故障がどうしたとかいう費用絡みの話も出てきますので、技官も委員会には入っていました。

— 組織体系について教えていただけますか。

川上: 技官の時代は、第三事務区というのがあって、その事務区の下に総務係の下に他の学系の技官を含めて何十人かが所属していて、そこから各学系に配属されているという体系だったんです。ただ、実際は配属先の先生たちがいろいろな指揮命令を出したりということになっていて、形式的な話になります。

技術室ができてからは、技術職員が全部集まってシステム情報系の下で動いているという形になっています。

⁷ 宍戸駿太郎(シンド シュンタロウ)筑波大学社会工学系初代学系長。2016年に逝去。

⁸ 宍戸駿太郎, 川上彰, 黒川基裕. (2011)「東日本大震災の計量経済分析。」産業連関 19(3) pp.40-50.

— 法人化前は、「技官」というのが正式名称だったんですか。

川上： ええ。

— 法人化後に、「技術職員」というのが正式名称に変わったということなのでしょうか。

川上： 筑波大学に関して言えば、法人化前は「技官」と言っていて、法人化になって「技術職員」という呼び名に変わったと思います。

— うまく言えないのですが、出世とかあるのでしょうか。

川上： 一般的に1級、2級辺りが確か技術職員と言っていました。その上の3級、4級になると、技術専門職員で、5級になると技術専門官が対応していると思います。要するに事務でいう係長とか課長補佐とか、ああいう呼び名と似たようなもんじゃないかと思うんですが。

— 職務に関わらず、社工だったり、大学だったり、「もっとこうしたらいいんだろ」「よくなるんだろ」という思いはありましたか。

川上： もう少し交流したほうがよかったのではないかと思います。40年も動かない、異動しないで同じ職場にいるというのは、職人さんは別にしても、こういう仕事だったら本当は異動すべきで、長くても10年ぐらいでいろんな所を回って、もっと交流すべきじゃないのかなと思いました。

— 40年！！

川上： 要領が分かっちゃうから、抜くところも分かるし。だから、そういう意味じゃあやりやすくて楽なんだけれども。その弊害も出てくるんじゃないかなと思います。

— 職務の中で、印象に残っていることはありますか。

川上： 個人的にはいろんな新しい技術に触れられて、それが実際に利用できるような環境を作れることでした。具体的に言うと、LDAP⁹なんていうのもありました。経営政策を担当していたころいろんなコンピューター環境があって、MacintoshとかWindows、UNIXなどですが、それらにログインするためのユーザーのIDとパスワードがばらばらになっちゃうんです。LDAPというのが出てきて統一できるという情報はあったんですが、まだあんまり使っている所はなかったり、情報がみんな英語

⁹ 川上彰 「LDAPを使った認証システムの構築」『筑波大学技術報告』No.25, pp. 54-58, 2005.
(<http://www.tech.tsukuba.ac.jp/report.html>)

なんです。試行錯誤して、経営政策のパソコンで、少ない台数だけれども、苦勞してやっと動いた時はうれしかったな。それが翌年、社工学類のコンピューター上でも使えそうだというのが分かって、最終的にはそういう環境に移っていったわけです。

— (資料2を確認し、) 2005年度ですね。

川上: やっとできて、実際に利用できるようになった時には、すごくやりがいがありました。

— この時までには、統一的に管理はできなかったんですか。

川上: その頃、NIS という環境があったんだけど、それもうまくいかないことが多かったんです。だから、統一がなかなかできなかった。全学の統一認証システム、実は LDAP を使っているんです。

— 川上さんが主導されたんですか?!

川上: いや。私じゃない(笑)。LDAP という仕組みは、既に公開されていました。ただ、実用的になるかどうかがよく分からなくて、試行錯誤してやっと利用できたんです。統一認証システムについては、学情センターが独自にやっていました。

— 3C 棟の1階の端末室の管理とか、システムの構築とか、保守・運営みたいなのが、大きな業務を占めていたということですか。

川上: そうですね。90年以降はそれが結構大きかったかもしれません。4年ごとに、学類計算機の更新があるんです。そうすると、その1年半ぐらい前から仕様策定委員会が始まるんです。その委員会も結構回数が頻繁にありましたし、下調べをやったり、そういうお手伝いの負担は割と大きかったです。

— 私達学生が、なにも考えずに普段使っているシステムにそのようなお話があるとは。

川上: 見えないところですがね。

— ありがとうございます。

川上: いえ、いえ(笑)



撮影: 黒田